

カフリニズムとマッカーシズムの
カトリック的背景
(The Catholic Background of Coughlinism
and McCarthyism)

Hiroaki Shiozaki*

SUMMARY IN ENGLISH: Coughlinism and McCarthyism have been called demagogic-social phenomena in the depressed and hysterical times of confrontation. Two demagogues, Coughlin and McCarthy, have been studied mainly as political or social subjects.

This paper aims to throw a new light upon the Catholic aspects of Coughlinism and McCarthyism that have not been referred to very much in studies about them.

First, the activities of Coughlinites and McCarthyites have to be considered in the context of an American Catholicism that was innocent at that time of real socio-politics and amalgamated mostly with conservative and patriotic Americanism.

Secondly, the popularity of Coughlinism and McCarthyism, especially among Irish and German American-Catholics, should be understood in the light of Marian Piety, which propagated not only Marian Cults, but also anti-Communism.

Thirdly, the spread of Coughlinism and McCarthyism could not be explained without the traditional Populism or Progressivism that has been dominant in Midwest Catholic circles.

Finally, future studies concerning these topics should aim at re-examining the attitudes of American bishops or Catholic reformists towards Coughlinism and McCarthyism with the help of recent American Theology.

* 塩崎弘明, Professor of International History, Junshin Women's Junior College, Nagasaki

はじめに

かつて冷戦ピーク時の1950年8月15日、ウィスコンシン州ナセダー(Necedah)のヴァン・ホーフ(Van Hoof)農場に約10万人のカトリック巡礼者が集まった。¹ 彼らは、前年1949年11月、農場主の夫人マリー・A・ヴァン・ホーフ(Mary Ann Van Hoof)²に現われたという聖母マリアを「崇拜」(教会より嚴重に禁止)³するために集まった人々であった。カトリック教会当局は、このヴァン・ホーフ夫人への聖母の出現を認めず、「マリアの被昇天」の祝日にあたる8月15日にヴァン・ホーフ農場に巡礼することを禁じた。にもかかわらず聖職者(60人の司祭と30人の修道女)を含めて10万人近い教徒が、「神の敵がアメリカ全土を徘徊している」、「災いがまず朝鮮に起こり始める」⁴等々のヴァン・ホーフ夫人を通して語り伝えられるいわゆる「聖母のメッセージ」に耳を傾けんとしたわけである。ところで、8月15日以前3回に及ぶ、ヴァン・ホーフ夫人に託されたと称するいわゆる「聖母のメッセージ」の中には、「カフリン(C. Coughlin)神父も犠牲者であり、殉教者である。それにマッカーシー(J. McCarthy)も殉教者である」⁵という下りがある。

ヴァン・ホーフ夫人に現われたといういわゆる「聖母のメッセージ」は、つまるところ共産主義を敵または災いと見なす、反共主義のカルト的宗教版であった。ナセダーのいわゆる「聖母出現」を事例として、「アメリカにおけるマリア信心と冷戦」⁶の関係を、第二次大戦後特に高まるファティマ(Fátima)やルールド(Lourdes)の聖母崇拜に絡めて後付けたクセルマン(T. A. Kselmann)が、マッカーシー研究家のクロスビー(D. F. Crosby)にならっているように、「1940年代から50年代にかけて、反共主義が多くのアメリカ・カトリック教徒にとって一つの生き方にさえなっていた」⁷。しかし、反共主義とアメリカ・カトリシズムとの関わりは、40年代、50年代にとどまらずカフリニズム(Coughlinism)の台頭に見られるように、恐慌時の1930年代にもその顕著なさまが窺われた。⁸ さらにこの際忘れてならないことは、恐慌時から冷戦時にかけてアメリカ・カトリック界に見られた反共主義は、教会のアメリカ化といわれるアメリカニズムとないまぜになっていたことである。⁹

そこで本稿では、これまで政治、経済、社会的な側面から論じられることの多かったカプリニズムとマッカーシイズムを、冷戦の終焉が謳われる今日的観点に立って、中西部のポピュリスト的革新運動の伝統にのり、煽動的な反共主義または反ユダヤ主義を標榜し、かつ愛国心を第一義とする保守的なアメリカニズムを唱えたカプリニズムとマッカーシイズムのカトリック的側面を明らかにしたい。¹⁰ もしも本稿の意図するところが果たされたとすれば、いささかなりともカプリニズムとマッカーシイズムの歴史的後付けの成果を得たことになるだけでなく、アメリカ・カトリシズムの特質の一端を明らかにし得たことになるのではないかと考える。

1. 反共・反ユダヤ主義者カプリン

「ラジオ司祭 (Radio Priest)」と呼ばれたチャールズ・E. カプリン (Charles E. Coughlin)¹¹ が生まれて今年でちょうど百年になる。1930年代の恐慌時、最も多い時で約四千万人 (全国民の約3人に1人) のラジオ聴取者を集めた「ラジオ司祭」カプリンは、ローズベルト (F. Roosevelt) 大統領とその周辺スタッフを除き、当時最も大きい影響力を持った人物であったといわれる。¹² しかし、今日では、20年代後半から30年代それに40年代初めにかけてラジオから流れるカプリンの声を直接耳にしたアメリカ人も数少なくなったため、カプリンは忘れられた過去の人以外の何者でもなくなりつつある。くわえて彼の活躍期間がわずか十数年間で、その上表舞台からの退場が長上の大司教ムーニー (E. Mooney)¹³ による「活動停止命令」であったこと、また1942年の「活動停止」以降は事実上引退を余儀なくされたこと等のため、カプリン及び彼に関わるカプリニズムは、一過性の泡沫的なデマゴグ現象として受け止められる嫌いが強い。¹⁴ 確かに、「社会正義」を求めて恐慌時に活躍する同じ司祭のライアン (J. A. Ryan)¹⁵ に比べて、カプリンの主義・主張は浅薄で世論に媚びた俗受けのするデマゴグ以外の何者でもない。だからといって、カプリンやカプリニズムをめぐる問題を一蹴したから事足りるとはいかないであろう。なぜなら、歴史とは現在と過去との対話であるという論法をもってすれば、負の遺産にこそ最も耳を傾ける必要があるからである。

そこでまず最初にカプリンの生い立ちを簡単に整理しておきたい。¹⁶ カナダのオンタリオ州ハミルトン (Hamilton) で、1891年10月25日

に生まれる。両親は共にアイルランド系で、妹が生まれて間もなく亡くなったのでカプリンは独りっ子として育った。アメリカ国籍を持つ父親は元船乗りで、カプリンが生まれた時は寺男の仕事をしていた。そして信仰心の篤かった母親はお針子であった。少年時代を生地の港町ハミルトンで過ごした彼は、トロントのバジリウス会経営の中・高等学校セント・マイケルズ・カレッジ (St. Michael's College) を経た後、1911年20歳の時にバジリウス会¹⁷に入会する。バジリウス会は、1822年フランスで聖職者養成を目的に創設された修道会である。1852年、バジリウス会のアメリカ本部が、トロントに設立されたセント・マイケルズ・カレッジに置かれる。後1881年にトロント大学のカレッジの一つとなるこのセント・マイケルズ・カレッジ (The University of St. Michael's College) は、バジリウス会士としてカプリンが司祭教育を受けたところである。司祭職を目指しながらその一方で、カトリック社会教説への関心からか政治方面に強い興味¹⁸を示したカプリンであったが、1916年25歳で司祭叙階への道を全うする。その後約7年間カプリンは、オンタリオ州ウィンザー (Windsor) 郊外の、デトロイトから川一つ隔てたバジリウス会経営のアサンプション・カレッジ (Assumption College) で教える。

ところが、1918年教会法の改正によってバジリウス会が在俗修道会として規定されることになったことと、1922年バジリウス会がフランス管区とアメリカ管区に分離し、アメリカ管区の会則が緩やかになったことを機会に、翌1923年カプリンは修道会司祭から教区司祭に転身する。彼の赴任先は、アサンプション・カレッジで教えていた頃から司牧の手伝いをしていたデトロイト教区であった。当時のデトロイト教区の司教は、アメリカ司教団の中で保守派を代表するギャラハー (M. J. Gallagher)¹⁹ であった。1923年から3年間、カトリックで当時市裁判事 (後に最高裁判事となる) であったマーフィー (F. Murphy)²⁰ らの力を借りてデトロイト教区司祭になるための準備をしたカプリンは、1926年5月ギャラハー司教の要請によりデトロイト郊外ロイヤル・オーク (Royal Oak) に創設された小教区教会「小さな花の聖堂 (The Shrine of the Little Flower)」付の主任司祭に就任する。ちなみにロイヤル・オークはクー・クラックス・クラン (Ku Klux Klan) 活動の盛んな土地柄であった。クランの活動が盛んだということは当然のごとく反カトリック的な空気の強さを意味した。1926年10月、クランによって引き起こされた反カトリック的な嫌がらせをきっかけに、カプリンは地元デトロイトのラジオ放送 (WRJ) を使って反カトリック的

ムードを和らげる試みに着手する。いずれにせよ政治または人種等に関する対立を増長するような問題を避けて、もっぱら児童を対象とした宗教的なテーマのみを取り上げたこのラジオ放送は、カプリンの話術の巧みさもあって大成功を収める。

やがてデトロイトでの成功に意を強くしたカプリンは、1929年南はオハイオ州、西はイリノイ州のシカゴまで放送網を広げる。放送ネットワークをミシガン州を越えて他州にまで拡大した1929年10月に始まる大恐慌後は、カプリンによるラジオ放送の内容が単に子供向けの宗教的なものから政治的、社会的なものに変わっていく。恐慌後大量に生み出された失業者や、恐慌の結果フラストレーションに落ち込んだ人々にとって、カプリンの煽動的なラジオ演説はカタルシスそのものであった。²¹ 1930年になるとCBSがカプリンの番組「小さき花のゴールデンアワー」を全国ネットワークにのせる。その内容は、「共産主義者の陰謀暴露」、「国際金融資本家(ユダヤ人) 批難」²²等々に及んだ。その結果先に触れたように、ピーク時で約四千万の聴衆を得る。ちなみにカプリンが強い影響力を受ける回勅、「クアドラジェジモ・アンノ(Quadragesimo Anno)」が発表された1931年、「回勅」発布を前後してカプリンはペンシルベニア州選出のマックファデン(L. Mcfadden)下院議員からインフレ政策を示教される。²³ 以後インフレ政策はカプリンの持論となる。ところでこの間カプリンは、進歩派のライアンや、急進派のドロシー・デイ(Dorothy Day)等からも支持され、彼の唱えるカプリニズムは、ミネソタの「農民・労働者党(Farmer-Labor Party)」やカナダ・アルバータ州の「社会信用運動(Social Credit Movememt)」に通ずる革新主義と受け取られていた。²⁴ 1932年春、大統領候補となるローズベルトと会見したカプリンは、11月の大統領選においてニューディール政策を掲げるローズベルトを熱心に支持する。しかし、翌1933年1月ローズベルトの大統領就任後、カプリンがローズベルトから疎んじられ始めたことをきっかけにして両者の間が次第に不仲となっていった。²⁵

決定的な対立²⁶は1935年からであったが、その前年1934年11月、カプリンは反ローズベルト勢力を結集せんとして、彼自ら創設した「全国社会正義同盟(The National Union for Social Justice)」への参集をラジオ放送を通して人々に呼び掛ける。2年後の1936年3月、カプリンは反共産主義、反ウォール・ストリート、反ユダヤ主義を標榜する『社会主義』²⁷誌を創刊して、「農民・労働者党」等を支持する一方で筆鋒鋭くローズベルトを論難し続けた。36年6月にはローズベルト再選

阻止を図らんとして、カプリンは「ユニオン党(Union Party)」をスミス(L.K.Smith)やタウンゼント(F.Townsend)と謀って結成する。²⁸ この「ユニオン党」結成を契機としてアメリカ・カトリック教会当局はもちろんのこと、教皇庁側も次第に反カプリンの立場を鮮明にし始める。既に1932年頃からカプリン批判を公にし始めていたボストンのオCONNELL(W. O'Connell)枢機卿や、ニューヨークのヘイズ(P. Hayes)枢機卿にとどまらず、カプリンと個人的に親交のあったクリーブランドのシュレムプス(J. Schrembs)司教でさえ「政党」活動を本格化するカプリンに対して批判的となる。²⁹ 1936年9月、バチカンの機関紙『オッセルバトーレ・ロマーノ(Osservatore Romano)』がカプリン批判を始める。³⁰ 翌月10月には教皇庁国務長官パチェリ(E. Pacelli)が、カプリン問題解決の為にアメリカに赴く。³¹ しかし、大統領選の結果カプリンの思惑が外れ、「ユニオン党」の大敗北に終わったこともあって、カプリンの活動停止等の処置は教会当局から取られることはなかった。1937年、アメリカ・カトリック界においても次第に孤立無援を余儀なくされていたカプリンは、追い討ちをかけるように、アメリカ・カトリック司教団中数少ない彼の支持者でありまた後見人であったギャラハー司教を失った。ちなみに彼は、ローマからカプリン支持を取りやめるように指示されていたといわれる。³² ギャラハーの後任として1938年夏新しくデトロイトの大司教に就任したのがムーニーであった。彼は前任者のギャラハー司教と違って、カプリンの「社会正義」運動を好ましいものと考えなかったばかりでなく、1938年に至ってカプリンが声高に提唱し始める反ユダヤ主義的な「キリスト教戦線(Christian Front)」に対しては、なんとしてでも阻止せんと苦慮する。³³ カプリンの反ユダヤ主義については改めて後に触れるとして、第二次大戦が始まる1939年を迎えてカプリンは、孤立主義の立場からアメリカの大戦介入反対キャンペーンを展開する。結局、太平洋戦争が始まる1941年に至ってもカプリンの反ローズベルト攻撃が止まず、翌1942年カプリンの言動は国家安全上利敵行為となるという理由で「スパイ活動法」が適用される。一方、教会当局もカプリンに対して放送・出版活動はもちろんのこと、一切の社会活動および教区内司牧活動の停止を命じた。³⁴ 以後1966年「小さき花の聖堂」付主任司祭を退くまで、カプリンの活動はロイヤル・オークの自らが建てた聖堂内に限られた。カプリンが亡くなったのは1979年10月のことで、場所はロイヤル・オークから北東に少し上ったブルームフィールド・ヒルズ(Bloomfield Hills)であった。³⁵

以上のごとく簡単にカプリンの生涯をたどってさえ、彼につきまとう毀誉褒貶振りが容易にうかがわれる。しかし、その一方で一言の弁解の余地もない、責められてしかるべきカプリンの誤ちがある。それが彼の反ユダヤ主義である。これまでの反ユダヤ主義者カプリンについての研究は、どちらかというとならざるファシズム支持者のカプリンの、象徴的極印として外在的に取り上げられることが多かった。³⁶ また、カプリンの反ユダヤ主義的言動を1942年まで結果的に許してしまうことになるアメリカ司教団についても、予断的に保守的体質の当然の帰結として上辺をなぞるだけで処理されてきた。³⁷ ところが1979年、カプリンの反ユダヤ主義思想のルーツとなるアイルランドの「聖霊会(Holy Ghost Fathers)」³⁸司祭フェイ(D. Fahey)の関係文書³⁹がアサンス(M. C. Athans)⁴⁰の手によって陽の目を見ることになり、また最近デトロイトの大司教区文書館に所蔵されていたムーニーの関係文書が公開(1986年)される運びとなり、これまでのカプリニズムと反ユダヤ主義に関する研究を修正または補訂する研究成果が徐々に始めている。そこでアサンスとモドラス(R. Modras)の研究成果⁴¹を参照にしながら、反ユダヤ主義をめぐるカプリンとフェイの関係及び、カプリンとムーニーとの関係をそれぞれ整理しておきたい。

1883年7月、フェイはアイルランドに生まれ、17歳の時フランスの聖霊会神学校に入学する。1907年フランスで初誓願を立てたフェイにとって、19世紀末から20世紀初めにかけてフランスにみなぎっていた反聖職者主義的空気は受け入れ難いものであった。フェイの司祭叙階は1911年ローマで行なわれたが、その間ローマに滞在中反動的で反ユダヤ主義的なアクション・フランセーズに加担していた聖霊会神学校校長ル・フロック(Henri L'Floch)と、イエズス会の神学者ピヨ(Louis Billot)枢機卿とから強い影響を受ける。⁴² 1912年アイルランドに帰ったフェイは、カトリック第一主義を標榜する「マリア・ドゥーチェ(Maria Duce)」⁴³と称するカトリック社会運動の創始者として活躍する。フェイは、超自然的な生命こそ人間にとって真の生命であり、神によって創造された世界は神の計画によって出来上がったものであると終始一貫して主張する。

それゆえ、フェイにとって最も受け入れ難いことは、超自然的な価値を認めようとしない「自然論」的な考えや運動であった。キリストの神秘体を具体化したローマ・カトリック教会によって宇宙の秩序が保たれるという考え方を抱いていたフェイは、超自然的な神の秩序に従わない自然主義者こそが神によって創造された世界の破壊者である

と「断罪」した。この世界破壊を目論む組織化された自然主義者の集団として、フェイはユダヤ人の組織集団を筆頭に上げる。このようなフェイの反ユダヤ主義が単に神学的、哲学的なレベルに留まるものではないことが推察される。キリストの神秘体を代表するカトリック教会を破壊せんとする張本人がユダヤ人である。このような所説こそがフェイの本音であったかと思われる。いずれにせよカプリンがフェイに関心を持つに至った経緯は、どうもフェイのユダヤ人サタン視と、それに関連するロシア革命のユダヤ人陰謀説に起因するといわなければならない。⁴⁴

先に述べたように、カプリンが反ユダヤ主義を公言し始めるのが1938年夏からである。まず、カプリン自身が発行責任者の『社会正義』誌に、ユダヤの世界転覆陰謀を暴かんと贖物「シオン長老の議定書」の抜粋を1938年7月から11月にかけて掲載する。しかし、カプリンが生の声で反ユダヤ主義を公にするのは、ホロコーストの狼煙となる「水晶の夜」から10ヵ月後の1938年11月20日である。ナチスによるユダヤ人迫害の問題を、共産主義者によるキリスト教徒迫害の問題に強引に摩り替え、キリスト教徒にとって不倶戴天の敵である共産主義の正体はユダヤ人なりとの牽強付会の論法をもって、カプリンは彼自身の反ユダヤ主義のエッセンスともいべきものをラジオ放送の中で公言してはばからなかった。とはいえモドラスも指摘しているように、公にはしなかったが個人的にカプリンは、すでに1933年頃から反ユダヤ主義的な態度を隠そうとはしなかった。⁴⁵

確かにモドラスがいうように、11月20日の反ユダヤ主義的な放送は、フェイとの思想的出会いを直接の契機とするものではないであろう。⁴⁶ しかし、だからといって1934,5年ごろからファシズムを好意的に受け入れ始めていたカプリンが、1938年の段階でファシズムを加えてナチズムにも好意を示し始めた結果が、反ユダヤ主義の公言を招いたともいえないであろう。やはりこの間の事情は、体制内の革新化を果すにあたって白か黒かの二者択一的な単純な論理しか持ち合わせていなかったカプリニズムにとって、あたかもゾロアスター教またはマニ教を連想させる善・悪二元論風のフェイの「神学思想」は、容易に重なり合うものであったと同時に、1938年の段階に至ってカプリニズムは、フェイの反ユダヤ思想を前面に打ち出さないう限り、先行きが見えなくなっていたとしかいいようがないわけである。その意味合いからして、カプリンの反ユダヤ主義公言の契機を、フェイの反ユダヤ主義的「神学思想」との出会いに求めることは、当を得た見解であろう

と思われる。

1938年8月8日号の『社会正義』誌上で、カフリンは初めてフェイをカフリニズム信奉者達に紹介する。フェイの著書『現代世界におけるキリストの神秘体』⁴⁷、『ロシアの支配者』⁴⁸等を紹介しながら、特に反キリスト教的な共産主義とユダヤ人との密接な関係を強調した。例えば、『現代世界におけるキリストの神秘体』からは、「世界を我が物にするために、ユダヤ系の銀行グループがユダヤ系の共産主義者と手を組んでボルシェビキ革命が引き起こされたことに、革命の仕掛人は満足している。」⁴⁹、また『ロシアの指導者』からは、「只今現在のロシアの政治権力の中枢はユダヤ人に占められている」⁵⁰という章または箇所がそれぞれ引用される。『現代世界におけるキリストの神秘体』から約7頁分の内容が引用されたいわゆる11月20日の放送後、改めてカフリンは、「フェイはアイルランドにおける最も偉大なる人間の一人である。」⁵¹とラジオ放送を通して人々に紹介する。翌月12月4日のラジオ放送では、フェイと電話で「反ユダヤ主義」について話し合ったことを紹介した上で、以前にも増してボルテージの上ったユダヤ攻撃を行なった。要するに、「共産主義こそが悪魔の本性に潜む悪しき力の表われである」⁵²と考えたカフリンには、フェイの共産主義またはユダヤ主義という名の「悪魔の神秘体」に関する「神学思想」は、何にも替え難いテキストであったようである。

それにしても神の名を偽るカフリンの反ユダヤ主義が、なぜ罷り通り得たのか。前述のごとく、カフリンを監督する立場にあったムーニー大司教に責任があったといわなければならないのか。これまでの一般的な見方としては、ムーニーのカフリンに対する措置が後手後手に回ったとしてムーニーを責める意見が多かった。しかし、公開されることになったムーニーの関係文書を知見する限り、ムーニーの責任を問うことについては注意しなければならないようである。1940年3月、ローズベルト大統領の個人的代表としてパチカンに派遣されていたティラー(M. Taylor)は、カフリンが領導した「キリスト教戦線」による反ユダヤ主義的破壊行為を中止させるようにマリオネ(L. Maglione) 国務長官に申し出る。⁵³しかし、パチカン初めアメリカ司教団も、直接に監督権を持つデトロイト大司教のムーニーも、具体的にカフリンに対して活動停止の措置が取れなかった。その最大の理由は、カフリンの言動が直接にカトリック教会を否定したり攻撃するものでなかったからである。1937年、ムーニーがデトロイトに赴任直後から、すでにカフリンとムーニーとの関係は、決して良好なものとは言えな

かった。カプリンが、カトリック教徒の「アメリカ産業別労働組合会議(C.I.O)」への加入反対を表明すると、直ちにムーニーがカプリンに反駁して加入賛成を表明する。⁵⁴ところが、カプリンにはムーニーの指導に従う意志は当初からなかったようである。ラジオ放送を中止するようにムーニーだけでなくチコニャニ(A. J. Cicognani)アメリカ駐在教皇使節もカプリンに申し渡すが、カプリンの聞き入れるところとはならなかった。このような監督または指導の不在は、カプリンの側に彼を支持する司教、司祭それにまた多くの信徒がいたことはもちろん、ムーニーやチコニャニにしても「言論の自由」を楯に活動するカプリンを封じ込める具体的な手段を持ち合わせていなかったからである。⁵⁵先に述べたごとく、ムーニーはしばしばカプリンの攻撃的反ユダヤ主義を見て見ない振りをしたという沈黙の科で責められるが、しかしそれは資料不足故の単なる憶測でしかなかった。

ムーニーは決してカプリンに対して妥協的ではなかった。1938年11月20日の日曜ミサでムーニーは「水晶の夜」事件で犠牲となったユダヤ人を悼む祈りを捧げるように信徒に指示を与えた。⁵⁶翌月12月になると、「全米カトリック福祉協議会(N. C. W. C)」の運営委員会議長としての立場から、ムーニーはプロテスタントの教会指導者達と図って、ナチスによるユダヤ人迫害に対する抗議声明(「恐怖と恥辱」)を公表する。⁵⁷さらに翌年39年4月には、「キリスト教徒は反ユダヤ主義の陣営に入ることは出来ない」⁵⁸という教皇ピオ(Pius)11世の言葉を引用しながら、「N. C. W. C」の名を借りて、暗にカプリニズムを批判する。ムーニーの個人的な対カプリン批判からすれば、公の場でもっとはっきりとした形のカプリン批判があつてしかるべきだったかもしれない。ところがムーニーにいわせれば、次のような手塚足枷に縛られ思い切った措置が取れなかった。カプリンに対する活動停止命令は、彼の信奉者を教会から離れさせる危険性がある。⁵⁹強制的な命令は、カトリック教会に対して権威主義的との悪い印象を抱かせる。⁶⁰50年後の今日、ムーニーが断固たる措置に踏み切れなかったとする理由は、いずれも理由として消極的であっても、積極的な理由になり得るものではない。なぜなら、カプリンの反ユダヤ主義または「社会正義」運動は、たとえローマ・カトリック教会に敵対するものではなく、それどころか教会擁護の立場に立つものであったとしても、即カトリックの信仰や倫理に適用のものであったかどうかということになると、否と答えざるをえないからである。

2. 反共主義者マッカーシー

「ローマ・カトリック教徒、とくにアイルランド系のカトリック教徒はこの擻猛なアイルランド人に過去の自分たちの屈辱の熱烈な復讐者を見出したのであり、かれらから見るとマッカーシーが呼び起こした批判はマッカーシーの、教会とその名前に対する憎悪に基づいているとしか考えられないのであった。」⁶¹ これはマッカーシズムを鋭く批判したロービア(R. H. Rovere)描くところの、マッカーシーの単純化された、それも多分に予断に満ちたカトリック的プロフィールである。まず最初に、マッカーシズムとアメリカ・カトリック界との関わりを明らかにするにあたって、「尾砲兵(Tail Gunner Joe)のジョー」と称されたマッカーシーの生い立ちのカトリック的側面を改めて整理しておきたい。⁶² 1908年11月14日ウィスコンシン州のグランド・シュート(Grand Chute)に生まれたマッカーシーは、1957年5月2日ワシントンで亡くなる。享年47歳であった。彼の生家は農家で、周辺をドイツ系とオランダ系の農民に取り囲まれたアイルランド系居住地の中にあつた。両親ともに信仰心の篤いローマ・カトリック教徒で、父親のティモシー(Timothy)は、アメリカ生れであつたが、彼の両親つまりマッカーシーの父方の祖父はアイルランド系の移民で、祖母はドイツ系の移民であつた。そしてマッカーシーの母親のブリジット(Bridget)はアイルランド系の移民であつた。

ドイツ系のカトリック教徒を多数派とするウィスコンシンのカトリック教会は、保守的で「民族主義」的傾向が強かつた。その傾向は、ウィスコンシンでは少数派のアイルランド系カトリック教会にも見られた。マッカーシー家が所属したアプルトン(Appleton)のセント・メリーズ(St. Mary's)教会もアイルランド系の「民族教会」の一つであつた。小教区の保守的カトリック・アクション団体「聖名会(Holy Name Society)」に入り道徳教育を受ける等の、セント・メリーズ教会を通して育まれたマッカーシーのカトリック信仰は、信心業を中心とした神学等には無批判な受動的信仰であつた。⁶³ もしマッカーシーが、アメリカ・カトリシズムのもう一つの潮流である進歩的で革新的な「アメリカニズム」や、カトリック社会教説に関わる「神学思想」に馴染んでおれば、後のマッカーシズムに見られるような浅薄なカトリシズム理解に基づく、手段を選ばぬ反共人身攻撃の弊から免れ得たのではないかと思われる。⁶⁴ ちなみに彼が所属した教会所在地のアプルトンは、冒頭で述べた「ナセダーの聖母」を崇拜する者が多く、ナセダー

の霊場を管理運営する委員会が組織されていた。⁶⁵ いずれにせよ、ナセダー、アプルトンそれにグリーン・ベイ (Green Bay) を結ぶウィスコンシンの中央部は、保守的で反共色の強い政治風土であった。⁶⁶ 1922年、14歳で地元のドイツ系が多かった初等中学校を卒業したマッカーシーは養鶏業を営む。反知性主義的な煽動的な政治屋マッカーシーの誕生は、貧乏な農家に生れ10代半ばで学校を離れた「丸太小屋」的な少年時代の生活史に由来するといわなければならない。

やがて20歳になって、グランド・シュートに近いマナワ (Manawa) の高校に入学し、1年間で4年分の学業を修了するに及んで、マッカーシーの「丸太小屋」的生活史は、次第にアメリカの成功神話の色合いを帯びるようになる。1930年秋、高校を卒業したマッカーシーはミルウォーキーのイエズス会経営のマーケット (Marquette) 大学⁶⁷ に進学する。入学時工学部に所属していた彼は、2年後法学部に転部する。在学中学費を捻出するためにアルバイトに明け暮れたようで、マッカーシーの学業成績は普通だった。また、マッカーシーのカトリック的側面に明るいイエズス会員のクロスビー (D. F. Crosby) が述べているように、マーケット大学在学中のマッカーシーは、ボクシングやその他のスポーツに熱中する極く平均的な、聖職者に敬意を払い日曜日のミサを欠かさぬカトリック学生であった。⁶⁸ 特別に影響を受けたイエズス会の司祭もいなかったし、当時「ラジオ司祭」として声望の高かったカフリンの「社会正義」運動、さらには60万人の会員数を誇ったアイルランド系アメリカ人の親善団体「ナイツ・オブ・コロンバス (Knights of Columbus)」⁶⁹ 等に興味を示すこともなかった。

マッカーシーについての該博な伝記作家であるリーブス (T. C. Reeves) が評しているように、マッカーシーの大学生生活は将来に恨みを残す知的訓練に欠けた軽佻浮薄なものであったが、それでも一応大学を卒業すると1935年弁護士を開業する。⁷⁰ その後マッカーシーは、ウィスコンシン州第七選挙区の「青年民主党クラブ」の議長となり、1936年民主党員として地方検事に立候補するが落選する。1939年、捲土重来を期して民主党員から共和党員に鞍替えし、第十選挙区の巡回判事当選を果す。結局巡回判事職は、1946年上院議員になるまで続けるが、その間1942年から44年にかけて海兵隊員として太平洋戦争に参加する。1936年を境にして政治の世界に本格的に足を入れるマッカーシーは、39年の巡回判事当選、46年の大物革新政治家ラフォレット2世 (R. M. La Follette, Jr.)⁷¹ に代っての上院議員当選と、回を重ねるごとに勝つという目的のためにはあらゆる術策を厭わぬ政治屋になつ

ていく。2期目の上院選を見越した1950年2月9日の「ウィーリング(Wheeling)演説」もまた、マッカーシーの上院議員当選を狙った術策の一つであった。国務省内に多くの共産主義者がいるという「ウィーリング演説」は当時冷戦状態が緊迫化する中で政争の種にするには恰好の材料であった。⁷²

従来マッカーシーに「ウィーリング演説」の知恵付けをしたのは、イエズス会経営のジョージタウン大学の外交官研修所長職にあったウォルシュ(E. Walsh)と見なす見解が一般的であった。1950年1月7日、マッカーシーはワシントンで夕食を共にしたウォルシュから、1952年の選挙戦の争点として「共産主義の勢力とその破壊活動」問題⁷³を取り上げられることを薦められたといわれる。しかし、ウォルシュの関係文書等に直接当って、この問題に精通しているクロスビーが述べているように、「ウィーリング演説」はウォルシュの示唆によるという見解には、資料的裏付けがないといわなければならない。⁷⁴むしろ「ウィーリング演説」の背景を知ろうと思うならば、オ布莱イエン(M. O'Brien)が指摘するように、すでに「ウィーリング演説」の3か月前に、マッカーシーが『マディソン・キャピタル・タイムズ(Madison Capital Times)』紙の記者を共産主義者のシンパとして批難している事実に着目すべきであろう。⁷⁵ということよりなにより一番肝要なことは、1950年前後の時代がいかに共産主義に対して過剰に反応する時代であったかを見極めておくことであろう。⁷⁶アメリカ・カトリック界における反応も決して冷静なものとはいえなかった。デ・サンティス(V. P. De Santis)の「アメリカ・カトリック界とマッカーシズム」⁷⁷に関するバランスのとれた研究を参照しながら、マッカーシズムに対するアメリカ・カトリック界の反応を整理しておきたい。

まず最初に断っておかなければならぬことは、マッカーシーがカトリック教徒で、また彼の支持者の中に多くのカトリック教徒がいたことから、アメリカ・カトリック教会はマッカーシーを支持していたと結論付ける見方があるが、そのような見方は短絡であるばかりでなく、予断に基づく誤った見方である。⁷⁸アメリカ・カトリック教会は、最初から最後までマッカーシズムに対して支持を与えるような言動を一切控え慎んだ。たとえ一部のカトリック勢力がマッカーシーに同調する動きを示したとしても、例えば反共主義の立場から一部マッカーシー擁護論に傾いた「ナイツ・オブ・コロンバス」のような団体または個人を問わず、教会を後ろ盾にマッカーシーを支持するカトリック勢力は皆無であった。⁷⁹マッカーシー支持を表明しなかったアメリカのカ

トリック教会は、だからといって不支持の表明を公式にしたわけではなかった。⁸⁰ マッカーシズムを政治問題の一つと見なした教会にとって、政治的中立の立場から支持または不支持いずれの表明をも公に出し難かった。さらに、アメリカ・カトリック教会を二分したマッカーシズムをめぐる激しい賛否両論の対立からして、マッカーシーの地元ウィスコンシンの司教団が中立の立場を取ったように、教会当局が統一的な公式声明を出すことは考えられなかった。⁸¹

1954年1月のギャラップ世論調査によると、アメリカ・カトリック教徒の内58%がマッカーシー支持を表明し、23%が反対を表明し、残りの19%が無回答であった。⁸² この調査はマッカーシーが全盛期のもので、数値的には非カトリックの一般アメリカ国民の対マッカーシズム態度表明に比べて、支持表明において8%高く、反対表明において6%低い数値がカトリック側に見られた。⁸³ ところで調査の数値は数値として、一般論からいうと、マッカーシーの選挙区ウィスコンシンの場合同様、大多数のカトリック教徒はたとえ積極的とはいえなかったが、マッカーシーへの支持を隠そうとしなかったし、1950年から54年にかけてのカトリック系新聞・雑誌に掲載された関係記事や読者の声等は、大半がマッカーシーを支持するものであった。⁸⁴ 6割近くに上るアメリカ・カトリック教徒のマッカーシー支持率を忖度すると、マッカーシーが唱える反共主義が単なる政治的イデオロギーの問題を越え、国家への忠誠度を問う踏み絵と化したことが高いマッカーシー支持率につながったと思われる。⁸⁵ くわえて宗教的信条から単純に無神論的共産主義に反対する立場を取って、マッカーシズムに与したことも否めないであろう。⁸⁶

マッカーシー支持率の半分弱にしか過ぎなかったが、マッカーシーまたはマッカーシズムに対するアメリカ・カトリック反対勢力の声は、数値以上に大きい影響力を持った。その理由としては、彼等の反マッカーシズムの主張がアメリカの原理となる民主主義擁護を目指していたことだけでなく、『アメリカ(America)』誌や『コモンウィール(Commonweal)』誌に代表される知識人向けカトリック系週刊誌等による反マッカーシズム論調の影響力の大きさが考えられる。マッカーシーまたはマッカーシズムを終始一貫批判した両誌は、カトリック教会内部に多くの敵を作る。⁸⁷ しかし少数ではあったが、『アメリカ』誌や『コモンウィール』誌の論調を支持する教会関係者もいた。その代表格がシカゴの補佐司教シール(B. J. Sheil)⁸⁸であった。1886年シカゴ生れのシールは、「若者の使徒」、「貧しい者の使徒」、「負け犬の使徒」、さら

には「労働者の司教」等々と呼ばれたように、進歩的かつ革新的な教役者であった。⁸⁹ 1928年にシカゴの補佐司教となって以降、アメリカ司教団中最もリベラルであったマンデライン(G. W. Mundelein)枢機卿の庇護の下、積極的にカトリック・アクションの発展に努める。1938年12月には、反ユダヤ主義を公然と口にする「ラジオ司祭」カフリンを、シール補佐司教は「非カトリック的」だという理由から批難する。⁹⁰ シール補佐司教にとってカフリンもマッカーシーも、共にアメリカが原理・原則とする民主主義を踏みじめるものと思われたようである。

1951年11月、公職に携わる者の義務についてアメリカ・カトリック司教団は、全国司教会議の席で次のような声明文を出す。「不正直、悪口、批難、中傷の類は他の人達にもあてはまることではあるが、政治に携わる者にとっては神の命に背くものである。」⁹¹ この声明はデ・サンティスも述べているように、名前を特定していなかったのでマッカーシーを批難するものとは受け止められなかった。⁹² しかし、クロスビーがデ・サンティスに反論しているように、かつて1930年代、煽動的な「ラジオ司祭」カフリンを厳しく咎めたりベラル派のムーニー枢機卿が声明文の起草者であったこと⁹³、また当時司教団に近かった関係者の証言⁹⁴等を勘案すると、間接的にマッカーシーを批判したものであったといえなくもない。要するに先にも述べたように、シール補佐司教を除いてほとんど反マッカーシズム表明を公にした司教がいなかったことは、1930年代にカフリンを批難するより、1950年代にマッカーシーを批難することの方が難しかったのではないと思われる。⁹⁵ 1954年4月、シール補佐司教はC.I.O.傘下の全米自動車労組のメンバー2,500人を前にして、「我々の生き方に大きい影響を与え、我々の伝統つまり民主主義の手続きやフェアプレーの精神を傷つけ、猜疑心を生み、気違いじみた追及の手をやめぬ不和を我々アメリカ人の間にもたらす奇妙な反共主義に対して反対しなければならない」⁹⁶と述べる。

以上のような反マッカーシズムの意見を述べるにあたってシール補佐司教は、一市民の立場で個人的見解を表明したものであって、司教職の立場から教会当局の見解を明らかにしたものではないことを断った。建前として個人的見解の表明に限るとはいえ、シール補佐司教の発言はアメリカ・カトリック界はもちろん、各方面に大きい影響を与えた。ヘネシー(J. Henesey)の表現を借りれば、「シールの発言で、アメリカのカトリックも少しは大胆に物が言えるようになった」⁹⁷。と同時に、カトリック教会とマッカーシズムを同一視する傾向が一般的で

あった非カトリック界の風向きも、シールの反マッカーシズム発言を境に変わり始め、アメリカ・カトリシズムとマッカーシズムを単純に重ね合わせたような議論が次第に少なくなる。ところで、シール補佐司教の発言が大きい波紋を投げかける至った背景に、次のような出来事があったことを忘れてはならないであろう。シール発言5日前の1954年4月4日、マッカーシーはニューヨーク市警のカトリック警察官6,000人を前にして反共演説をする。演説の冒頭で、30年間市警の指導司祭職にあったマッカフレイ(J. McCaffrey)が、共産主義者の摘発に全力を発揮した人物としてマッカーシーを紹介する。聴衆のアイルランド系を中心とするカトリック警察官達は、マッカーシーを歓呼の声をあげて褒めたてた。⁹⁸

この先にも触れた「聖名会」のニューヨーク市警支部主催の集会で、マッカーシーと同席し、彼の演説を賞賛したのがスペルマン(F. Spellman)枢機卿⁹⁹である。「アメリカの教皇」とも呼ばれたアイルランド系のスペルマンは、1889年マサチューセッツ州のフィットマン(Whitman)に生まれ、ローマで1916年司祭に叙階される。その後1932年、ボストンの補佐司教に任じられるまで約7年間教皇庁に勤め、後の教皇ピオ12世となるパチェリ國務長官から知遇を受ける。1939年4月、スペルマンは新しく教皇の座に就いたピオ12世からニューヨーク大司教に任じられ、1946年には枢機卿となる。アメリカ司教団のリベラルな革新派を代表する司教がシールであったとすれば、反リベラルな保守派を代表したのがスペルマン枢機卿であった。第二次大戦期から戦後にかけて高揚するアメリカニズムは、とりわけ戦後の冷戦時代に反共主義とないまぜとなり、いわゆる冷戦思考の典型的なアメリカ版となる。この反共主義的アメリカニズムをカトリック陣営から政治的に代弁したのが「アメリカの教皇」スペルマンであり、それを理論的にサポートしたのが著名な説教家で作家のシーン(F. J. Sheen)司教であった。

1953年8月、ミルウォーキーで開かれた復員軍人大会に出席したスペルマンは、マッカーシーについてどう考えるかと聞かれ、「彼はアメリカ人に共産主義の危険性を覚醒させている」¹⁰⁰と答える。このようなスペルマンのマッカーシズムに対する積極的な評価は、彼自身に言わせれば「(アメリカの)名誉と愛国心」¹⁰¹に拠るものであった。スペルマンだけでなく、マッカーシーを支持した大半のカトリック関係者は、マッカーシズムの中にアメリカの優位を説くアメリカニズムを見出したようである。それゆえか、当時99を数えたアメリカのカトリッ

ク系定期刊行物の大半は、シール補佐司教の反マッカーシー発言に対して批判的態度を取る。例えば、これ等 99 種の週刊紙・誌の内、46 種の教区報等を別にして、残りの 53 種の週刊紙の中から 46 紙について、デ・サンティスがサンプル調査を試みた結果は次のようなものであった。¹⁰² 22 紙がシールの発言を完全に無視し、その中にはシールの所属教区であるシカゴの『ニューワールド (New World)』紙も含まれていた。残り 24 紙には 650 字から成る関係記事が掲載されるが、全て「全米カトリック福祉協議会通信社(N.C.W.C.N.S.)」から流されたものである。¹⁰³

『プロビデンス・ヴィジター(Providence Visitor)』、『セント・ポール・ワンダラー(St. Paul Wanderer)』のようにシールの発言に好意的なものから、『ピッツバーク・カソリック(Pittsburgh Catholic)』、ロサンゼルス『タイディングス(Tiding's)』のようにシールの発言に批判的なものまで賛否両論色々あった。しかし、カトリック系週刊紙・誌に寄せられた読者の声に見られるように、一般論としてニューヨークの『ブルックリン・タブレット(Brooklyn Tablet)』紙に代表される親マッカーシー、反シールの論調が大勢を占めていた。ちなみにカトリック系新聞の中で、マッカーシーを最も英雄視したのが『ブルックリン・タブレット』であった。マッカーシーがカトリック系新聞から好意的な支持を受けるのはすでに「ウィーリング演説」直後からのことであった。1950年5月、ニューヨーク州ロチェスター(Rochester)で開かれたカトリック系新聞連盟40周年大会にマッカーシーが招待される。彼は席上基調演説を行い、「我々のすぐそばにまで浸透している共産主義を駆逐するために、国務省内の赤狩りに取り掛かったのだ」¹⁰⁴と述べる。出席していたカトリック新聞関係者からは好意的な支持を得る。

ところがマッカーシーの基調演説の前に席を立った「全米カトリック福祉協議会」の新聞委員会担当司教レディ(M. J. Ready)は、大会の親マッカーシー色の強さに憂慮を示し、「ヒステリックな声に反対する」¹⁰⁵ようにカトリック新聞関係者に警告した。レディ司祭の憂慮は、マッカーシズムをめぐる対プロテスタント関係においてやがて現実的なものとなる。プロテスタント側のいい分は、マッカーシーは赤狩りを通してカトリック勢力の伸張を謀っているというものであった。それに対してカトリック側は、「全米カトリック福祉協議会」の社会活動委員会副委員長ヒギンス(G. G. Higgins)等が先頭に立って、マッカーシズムとアメリカ・カトリック教会との関連性を強く否定した。1954年1月のギャラップ世論調査によると、マッカーシーの支持率はプロ

テスタント側の49%に対して、カトリック側は58%であった。¹⁰⁶ カトリック、プロテスタント双方間の差は9%である。しかし、カトリック側に見られた親マッカーシーの動きは、9%以上の差が両者間にあるのではないかとの見方をプロテスタント側に与えたようである。例えばウイスコンシンにおいては、メソジストを中心にこの数値以上にプロテスタント側の反マッカーシー気運が窺われた。¹⁰⁷

ところが1954年2月、陸軍対マッカーシー公聴会が始まるとカトリック側における対マッカーシー観も大きく変化する。2か月後の4月ギャロップ世論調査によると、カトリック内の対マッカーシー支持率が46%となる。¹⁰⁸ この数値は同年1月の58%に比べて12%の減である。しかし、この数値はデ・サンティスが述べているように、「最初マッカーシーを支持していたものが、やがて彼を咎めるようになったことを証明し得る数値ではない。」¹⁰⁹ むしろデ・サンティス同様、親マッカーシーの立場を取った『ボストン・パイロット (Boston Pilot)』の次のような結論に同意せざるをえない。「反対は依然として反対派であり、賛成派は、依然として賛成派である。ほとんどのものは大きく意見を変えていない、もし変化があるとすれば、その依拠する言い回しが変わっただけのことである」。¹¹⁰ だからといってデ・サンティスが結論付ける、「カトリック側がマッカーシーを支持することになった最大の理由は、アメリカ・カトリシズムに見られた孤立主義的傾向に由来する」¹¹¹、とする意見には同意し難い。なぜなら、そのような結論ではアメリカ・カトリシズムが課題としなければならなかった、政治・社会問題をめぐる「アメリカの神学」が見定め難いものとならざるをえないからである。

おわりに

一昨年1989年12月のゴルバチョフ(M. S. Gorbachyov)によるバチカン訪問は、冷戦終焉を象徴する出来事の一つであった。ギリシア正教徒としての洗礼を受けた共産主義者ゴルバチョフと、かつてソ連の衛星国であったポーランド出身の教皇ヨハネ・パウロ(Johannes Paulus) 2世との会見は、東西対決に替って平和共存を謳う象徴的な出来事との観を抱かせた。この間ソ連を中心とする共産圏の変化には著しいものがあるが、ローマ・カトリック教会の側にも1962年から始まる第二バチカン公会議を境にして、顕著な刷新が見られた。いわゆる

教会の現代化である。この教会の現代化に関して信教の自由を中心に積極的な推進役を果たしたのが、アメリカ・カトリック教会であった。¹¹² 移民教会として発展したアメリカ・カトリック教会は、19世紀後半以降アメリカ・カトリシズムとアメリカ文化との同一化、つまりアメリカニズムの推進をはかる。しかし、1891年の教皇レオ(Leo) 13世によるいわゆる「アメリカニズムの排斥」にみられるように、進歩的アメリカニズム運動は一頓挫をきたす。それにまた第一次大戦後、アメリカ司教団の「社会的再建築」に代表される新しい進歩的アメリカニズムが再び息をふきかえすが、決して大勢となることはなかった。¹¹³ 結局恐慌時から冷戦時代にかけて、非ワズプ(WASP)の労働者を中心とする大半が中・下層の一般カトリック大衆間に、冒頭で触れた「聖母崇拜」の高まりとないまぜになった愛国心を錦の御旗とする保守的なアメリカニズムが台頭する。

要するに、カフリニズムに見られる反共・反ユダヤ主義、さらにマッカーシズムに見られる反共主義も共に、アイルランド系またはドイツ系のカトリック教徒に多くみられた愛国主義的解釈によるアメリカニズムの変種である。¹¹⁴ しかし、60年代から第二バチカン公会議の流れに呼応して、「イノセント(Innocent)」な、つまり未成熟な状態から成熟したものへと変貌を遂げるアメリカ・カトリック教会は、過剰な愛国心はもちろん、過剰なアメリカ化を必要としなくなる。¹¹⁵ アイルランド系カトリックの政治屋マッカーシーを評してリーディ(G.E. Reedy)がいうように、「(彼は、) ジャガイモ不作の結果生じたアイルランド系アメリカ人の暗愚な精神的一面が露となった移民史の最後を飾るものであった」¹¹⁶。そしてこの中西部の非エリート・ポピュリストのマッカーシーと、進歩的エリート・ポピュリストのラフォレット(R.M. La Follete)間のミッシング・リンクとなるのがカフリンである。¹¹⁷ 今後の残された課題としては、80年代になってアメリカ・カトリック司教団から出された『平和の挑戦(The Challenge of Peace)』、『万人に経済正義(Economic Justice for All)』等の進歩的で革新的な「教書」に照らして、いかにすればカフリニズムとマッカーシズムを過不足なくアメリカ・カトリシズムの文脈中に位置付け得るかである。¹¹⁸

Notes

- 1 Thomas A. Kselman and Steven Avella, "Marian Piety and the Cold War in the United States", *The Catholic Historical Review*, vol. LXXII, no.3 (July, 1986), P.403. 当時ナセダーの人口は 900 人 (大半カトリック)。
- 2 (1909-1984), 1934 年ペンシルベニアからウィスコンシンに移る。
- 3 Mariolatry, つまり聖母マリアの礼拝(adoration) の禁止。
- 4 Kselman and Avella, "Marian Piety and the Cold War", *op. cit.*, p.404.
- 5 Mary Ann Van Hoof, *Revelations and Messages* (Necedah, Wisconsin, 1971), P.122. 興味深いことに, Bob La Follette も「殉教者」に上げられている。
- 6 Thomas A. Kselman, *Our Lady of Necedah. Marian Piety and The Cold War* (University of Notre Dame, 1982).
- 7 *Ibid.*, P.15. Donald F. Crosby, S.J., *God, Church, and Flag* (The University of North Carolina Press, 1978), p.8.
- 8 cf., John Earl Haynes, *Communism and Anticommunism in the United States* (New York, 1987).
- 9 M.J. Heale, *American Anticommunism* (The Johns Hopkins University Press, 1990), p.108.
- 10 cf., Gary Gerstle, *Working - Class Americanism* (Cambridge University Press, 1989). 問題関心に通ずるものがある。
- 11 Donald Warren, *Biographical Study on the Public Career of Father Charles Coughlin* (Detroit: Wayne State University) の一日も早い刊行が待たれる。
- 12 参照, イザベル・レイトン編 (木下秀夫訳) 『アスピリン・エイジ (中)』 (早川書房, 1979 年), 133-181 頁。
- 13 Gerald P. Fogarty, S.J., *The Vatican and the American Hierarchy from 1870 to 1965* (Wilmington, Delaware, 1985), p.242, pp.251-254. 彼は 1931 年から 33 年まで日本駐在の教皇使節であった。
- 14 cf., Geoffrey S. Smith, *To Save a Nation* (New York, 1973), Alan Brinkley, *Voices of Protest* (New York, 1982) 等々。
- 15 Fogarty, *The Vatican*, *op. cit.*, pp.237-9.
- 16 Louis B. Ward, *Father Charles E. Coughlin* (Detroit, 1933) と Sheldon Marcus, *Father Coughlin* (Boston, 1973) に主に依拠する。
- 17 Basilian Fathers, C.S.B. 現在の本部はトロント。
- 18 cf., Neil Betten, *Catholic Activism and the Industrial Worker* (University Press of Florida, 1976), pp.90-154.
- 19 (1866-1937), デトロイト司教(1918-1937)。1890 年代にオーストラリアで学んだ彼は, コルポラティズム国家を目指したザイベル(I. Seipel) やドルフス(E. Dollfuss) 等と親交を結ぶ。カトリック・コルポラティズムの信奉者。
- 20 J. Woodford Howard, Jr., *Mr. Justice Murphy* (Princeton University Press, 1968),

- pp.43-44.
- 21 cf., Charles J. Tull, *Father Coughlin and the New Deal* (Syracuse, 1965). Daria J. O'Brien, *American Catholics and Social Reform* (New York, 1968), pp. 151-181.
 - 22 Smith, *To Save a Nation*, *op. cit.*, p. 13. 教皇ピオ 11 世の「反共表明」がアメリカで話題となる。
 - 23 Tull, *Father Coughlin*, *op. cit.*, pp. 6-7.
 - 24 Betten, *Catholic Activism*, *op. cit.*, p. 94. Smith, *To Save a Nation*, *op. cit.*, p. 27. 「革新派」と言うことで通底。
 - 25 cf., George Q. Flynn, *American Catholics and the Roosevelt Presidency 1932-1936* (University of Kentucky Press, 1968).
 - 26 *ibid.*, p. 202. 「国際司法裁判所」への参加問題。
 - 27 購売部数約 185,000。1942 年発行停止。
 - 28 cf., Craig A. Newton, “Father Coughlin and His Nation Union for Social Justice”, *Southwestern Social Science Quarterly*, no. 41 (December, 1960).
 - 29 Tull, *Father Coughlin*, *op. cit.*, pp. 18-19, p. 46, p. 157.
 - 30 *ibid.*, p. 143.
 - 31 *ibid.*, p. 150.
 - 32 この年 1937 年に無神論の共産主義を否認した回勅「ディヴィニ・レデンプトリス (Divini Redemptoris)」が公布されるが、決してカプリン支持にはつながらなかった。
 - 33 Brinkley, *Voices of Protest*, *op. cit.*, p. 267.
 - 34 これを契機に「ファシスト的」カプリン像が定着する。
 - 35 死ぬまで自説を曲げなかったカプリンを惜しむ声が教会内になくはなかった。(Marcus, *Father Coughlin*, *op. cit.*, p. 8, 22).
 - 36 cf., James P. Shenton, “Fascism and Father Coughlin”, *Wisconsin Magazine of History*, no. 44 (August, 1960) 等。
 - 37 先述のオコンネル、ヘイズの他シカゴのマンデライン (Mundelein) 枢機卿等も反カプリンの立場を取っていた。
 - 38 C.S.Sp., 1703 年バリーで創設される。
 - 39 ダブリンの「聖霊会」アイルランド管区文書室所蔵。
 - 40 1979 年から翌 80 年にかけて調査。
 - 41 Mary C. Athans, BVM., “A New Perspective on Father Charles E. Coughlin”, *Church History*, vol. 56, no. 2 (June, 1987). Ronald Modras, “Father Coughlin and Anti-Semitism: Fifty Years Later,” *Journal of Church and State*, no. 31 (April, 1989).
 - 42 参照, R. オーベール他著 (上智大学中世思想研究所編訳『キリスト教史(9)・自由主義とキリスト教』(講談社, 1982 年), 68-100 頁。
 - 43 J.H. Whyte, *Church and State in Modern Ireland, 1923-1970* (Dublin, 1980), p. 163.
 - 44 Athans, “A New Perspective”, *op. cit.*, p. 227.
 - 45 Modras, “Anti-Semitism”, *op. cit.*, p. 236.

カフリニズムとマッカーシズムのカトリック的背景

- 46 *ibid.*, p.237. 彼の見解は「水晶の夜」事件に関連させるものであった。
- 47 *The Mystical Body of Christ in the Modern World* (Dublin, 1935).
- 48 *The Rulers of Russia* (Dublin, 1939).
- 49 Fahey, *The Mystical Body of Christ*, *op. cit.*, Chap. 6.
- 50 *Social Justice*, 8 August 1938, p.5.
- 51 Modras, "Anti-Semitism", *op. cit.*, p.230.
- 52 *Social Justice*, 21 November 1938, p.23.
- 53 Modras, "Anti-Semitism", *op. cit.*, p.240.
- 54 *ibid.*, p.241.
- 55 Tull, *Father Coughlin*, *op. cit.*, pp.182-185.
- 56 *Michigan Catholic*, 17 November 1938.
- 57 *N C WC News Service*, 24 December 1938.
- 58 *ibid.*, 19 April 1939.
- 59 Modras, "Anti-Semitism", *op. cit.*, p.245.
- 60 *ibid.*
- 61 R.H. ローピア著(宮内健次郎訳)『マッカーシズム』(岩波書店, 1984年), 32頁。
- 62 Tomas C. Reeves, *The Life and Times of Joe McCarthy* (New York, 1982).
Michael J. O'Brien, *McCarthy and McCarthyism in Wisconsin* (Columbia, Mo., 1980). Crosby, *God, Church, and Flag*, *op. cit.*, Chap.2. 等に主に依拠。
- 63 cf., O'Brien, *McCarthy and McCarthyism*, *op. cit.*, p.3.
- 64 参照, 拙稿「アメリカニズム論争の背景と意義」(『純心女子短期大学紀要』, 第27号, 1991年)。
- 65 教会当局による公式の禁止通達は1975年。現在の活動メンバーは500人程。
- 66 教区の機関紙『*Our Sunday Visitor*』に見られるように「親マッカーシー」的であった。
- 67 cf., R. N. Hamilton, *The Story of Marquette University* (Milwaukee, 1953).
- 68 Donald F. Crosby, S.J., "Jesuits and Joe McCarthy", *Church History*, (September, 1977), p.374.
- 69 cf., C. J. Kauffman, *Faith & Fraternalism* (New York, 1982).
- 70 T. C. Reeves, (ed.), *McCarthyism* (Malabar, Florida, 1982), p.12.
- 71 cf., R. J. Maney, 'Young Bob' *La Follette* (University of Missouri Press, 1978).
- 72 cf., R. M. Fried, *Nightmare in Red* (New York, 1990).
- 73 前掲書『マッカーシズム』, 162頁。
- 74 Crosby, "The Jesuits and Joe McCarthy" *op. cit.*, pp.375-376.
- 75 Crosby, *God, Church, and Flag*, *op. cit.*, p.49.
- 76 cf., Patrick Allitt, "American Catholics and the New Conservatism of the 1950's", *U.S. Catholic Historian*, vol.7, no.1 (Winter, 1988), pp.15-37.
- 77 V. P. De Santis, "American Catholics and McCarthyism", *The Catholic Historical Review*, vol.LI, no.1 (April, 1965).
- 78 地域やエスニック・バックグラウンド等によって異なる。マッカーシーを最も強く支

持したのは北東部（マサチューセッツが中心）のアイランド系であった。ウイスコンシンの場合（カトリック人口は1/3）は程々であった。（cf., Crosby, *God, Church, and Flag*, *op. cit.*, p. 232）。

- 79 Kauffman, *Faith & Fraternalism*, *op. cit.*, p. 364.
- 80 De Santis, "American Catholics", *op. cit.*, p. 2.
- 81 O'Brien, *McCarthy and McCarthyism*, *op. cit.*, p. 178.
- 82 De Santis, "American Catholics", *op. cit.*, p. 2.
- 83 前掲書『マッカーシズム』, 34頁。
- 84 De Santis, "American Catholics", *op. cit.*, p. 2.
- 85 Francis Downing, "Patriots' and 'Controversial' Figures", *Commonweal*, 55, November 7, 1951, pp. 90-91.
- 86 cf., Edmund A Walsh, *Total Empire* (Milwaukee, 1951).
- 87 De Santis, "American Catholics", *op. cit.*, pp. 5-7.
- 88 cf., R. L. Treat, *Bishop Sheil and the CYO* (New York, 1951).
- 89 E. R. Kantowicz, *Corporation Sole* (University of Notre Dame Press, 1983) pp. 173-188.
- 90 P. A. Grant, Jr., "Bishop Bernard J. Sheil's Condemnation of Senator Joseph R. McCarthy" *Records of the American Catholic Historical Society of Philadelphia*, vol. 97. no. 1-4. (March-December, 1986), p. 43.
- 91 J. Anderson and R. W. May, *McCarthy* (Boston, 1952) p. 395.
- 92 De Santis, "American Catholics", *op. cit.*, p. 8.
- 93 Donald F. Crosby, S. J., "The Catholic Bishop and Senator Joseph McCarthy", *Records of the American Catholic Historical Society*, vol. 86. no. 1-4 (March-December, 1975), p. 135.
- 94 「N.C.W.C」社会活動局長のヒギンズ(G. Higgins)や同じく「N.C.W.C」社会活動局のクローニン(J. F. Cronin)等。
- 95 Kantowicz, *Corporation Sole*, *op. cit.*, p. 197.
- 96 De Santis, "American Catholics", *op. cit.*, p. 8. カトリック系の労働組合はマッカーシーに同調しなかった。
- 97 James Hennessey, S. J., *American Catholicism* (New York, 1981), p. 47.
- 98 *New York Times*, April 5, 1954.
- 99 cf., John Cooney, *The American Pope* (New York, 1984).
- 100 De Santis, "American Catholics", *op. cit.*, p. 10.
- 101 *Brooklyn Tablet*, August 15, 1953, p. 6.
- 102 De Santis, "American Catholics", *op. cit.*, p. 11.
- 103 1954年5月9日付『カトリック新聞』。
- 104 *Commonweal*, L 11 (June 9, 1950), p. 212.
- 105 *Ibid.*
- 106 De Santis, "American Catholics", *op. cit.*, p. 24.
- 107 O'Brien, *McCarthy and McCarthyism*, *op. cit.*, p. 179.

カフリニズムとマッカーシズムのカトリック的背景

- 108 *Ibid.*, p.29.
- 109 *Ibid.*
- 110 *Boston Pilot*, June 5, 1954, p.4.
- 111 De Santis, "American Catholics", *op. cit.*, p.4.
- 112 参照, J. T. エリス他著(上智大学中世思想研究所編訳『キリスト教史(10)・現代世界とキリスト教の発展』(講談社, 1982年), 185-194頁。
- 113 cf., Joseph M. McShane, S.J., "Sufficiently Radical" (The Catholic University of American Press, 1986) p.247, 282.
- 114 cf., Ronald H. Bayor, *Neighbors in Conflict* (The Johns Hopkins University Press, 1978), Chap.5.
- 115 cf., W. M. Halsey, *The Survival of American Innocence* (University of Notre Dame Press, 1980).
- 116 George C. Reedy, *From the Ward to the White House* (New York, 1991), p.165.
- 117 Reeves, *McCarthyism*, *op. cit.*, p.102.
- 118 参照, 拙稿「レオ13世の『労働回勅』とアメリカ・カトリック労働運動の進展(『純心女子短期大学紀要』, 第26集, 1990年)。